

「初夏に観たい名画と俳句」



歌川広重『名所江戸百景』 六十四. 水道橋駿河台 より

めぐり来る季節に合う名画と俳句、第四回目は歌川広重（うたがわ ひろしげ）（1797-1858）の『名所江戸百景』から初夏に観たい作品と俳句です。

名所絵は風景を描くものと思っていましたが、それだけにとどまらない空気感、人々の暮らしの息づかい、季節や時間、天候の移ろいまでを感じさせてくれるのが、『名所江戸百景』の魅力です。

『名所江戸百景』は安政三年～五年（1856 年-1858 年）に制作され、全百二十枚（二代目歌川広重の作品一点、ならびに目録を含む）で構成されています。

かつての美しく情緒豊かな、広重が見ていた 165 年前の江戸の風景から、今回は初夏を描いた作品を選びました。

俳句とともに楽しみ下さい。

1. 日本橋江戸ばし (にほんばしえどばし)

『名所江戸百景』四十三



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_043.jpg

四十三. 日本橋江戸ばし | 安政四年 (1857 年) 十二月

画面手前に大きく描かれているのは日本橋の欄干です。
 橋の上から、下流の江戸橋を眺める視点で描かれています。
 江戸橋の奥には顔をのぞかせた朝日が、紅色のぼかし摺の中に見えます。
 欄干の柱頭にあるのは擬宝子（ぎぼし）と呼ばれる格式の高い飾りで、これを許された橋は町屋では日本橋、京橋、新橋しかありません。
 画面右下の桶には、初夏に旬を迎えた初鰯。
 「女房を質に入れても初鰯」と川柳に詠まれた江戸っ子の好物です。
 日本橋の近くに魚河岸（うおがし）があり、高値にもかかわらず珍重された鰯は、新鮮さを保つため、夜通し江戸に運ばれていました。
 これから棒手振（ぼてふ）りと呼ばれた魚売りが、天秤棒（てんびんぼう）を担ぎ、初鰯を江戸市中に売り歩こうとしています。
 鰯を入れた桶と天秤棒だけを描き、その気配を感じさせる見事な作品です。

鰯は黒潮の流れに沿って北上してきます。
 三月ころに四国沖に、四月には紀州沖に、そして青葉のころ、関東近辺にさしかかります。
 山口素堂（やまぐち そどう）（1642-1716）の
 目には青葉山ほとゝぎすはつ松魚（がつお）
 は鰯を詠んだ句の中ではもっともよく知られた句です。
 「青葉」「山ほとゝぎす」「はつ松魚」と三つも季重（きがさ）なりですが、待ちうけていたものを得た喜びが発散しています。
 この頃、鎌倉や小田原あたりでとれた鰯はそれ程味がよく、珍重され、待望されていました。

ここでは素堂の句以外で「初鰯」を詠んだ句を選びました。

鎌倉を生きて出でけむ初鰯（出で=いで）
 松尾芭蕉（まつお ばしょう）（1644-1694）

上の句はなんであらうと初松魚
 加藤郁乎（かとう いくや）（1929-2012）

2. 赤坂桐畑 (あかさかきりばたけ)

『名所江戸百景』 四十八



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_048.jpg

四十八. 赤坂桐畑 | 安政三年 (1856 年) 四月

画面中央に桐の木を配した大胆な構図です。
 初夏の季節らしく、花を咲かせています。
 まだ若い桐なのか、雨粒を残しているかのように大きな葉が輝き、一枚一枚に雲母摺（きらずり）が用いられ緑の濃淡が美しく表現されています。
 画面中央下に広がるのは溜池で慶長十一年（1606 年）、紀伊和歌山藩初代藩主 浅野幸長（あさの よしなが）が虎ノ門に洗堰（あらいぜき）を築いて作ったものです。
 その土手の補強のために桐の木を多く植えたため桐畑と呼ばれました。
 池には無数の斑点が描かれていますが、これらは蓮の葉で、桐と同様に初夏の季節であることを示しています。
 画面左手の岡には山王権現社があるのですが、それらしき社殿は描かれていません。

桐は初夏のころ、巫女（みこ）の振る鈴のような紫色の花を枝先に多数下向きに咲かせます。
 遠くから眺めても梢の紫は美しく、清楚です。
 花は広がって落下していて芳香があるので、桐の木の存在がよくわかります。
 花が落ち始めると毛のあるハート形の葉が出て、大きなものは径 30 センチほどにもなります。
 樹高も 10 メートルを超すものもあり、材は軽く、箆笥（たんす）や下駄箱、琴をはじめとする楽器、端材では下駄を作りました。
 女の子が生まれると嫁入り道具を作るために生長の早い桐の木を植えたりもしました。

ここでは「桐の花」を詠んだ句を選びました。

桐咲いて雲はひかりの中に入る

飯田龍太（いいだ りゅうた）（1920-2007）

薫じつつどこまで桐の花通り（薫じつつ=くんじつつ）

堀口星眠（ほりぐち せいみん）（1923-2015）

3. 駒形堂吾嬬橋 (こまがたどうあずまばし)

『名所江戸百景』五十六



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_055.jpg

五十六. 駒形堂吾嬬橋 | 安政四年 (1857 年) 一月

どんよりとした空から五月雨（さみだれ）が降るなか、一羽のほととぎすが啼きながら飛んでいます。

空に浮かぶぼんやりとした雨雲はあてなぼかしの手法が効果的に用いられていて、白く細い線での雨足の表現もかすかで味わいがあります。

画面左下には馬頭観音を祀る駒形堂、その屋根の先には隅田川に架かる吾妻橋が見えます。

画面手前の赤い幟は、白粉（おしろい）や紅を扱う紅屋百助のものです。

駒形とほととぎすとの組み合わせは、吉原遊廓三浦屋の当代きっての人気花魁（おいらん）二代高尾太夫と伊達政宗の孫で仙台藩主伊達綱宗とのエピソードを芝居に仕立てたことで人気を博し、二代高尾太夫の句

君は今駒形あたりほととぎす

は有名になりました。

美女にこんな句を詠まれば男はイチコロです。

伊達綱宗の大きな勘違いから、意地の張り合い、そして両者にとって悲惨な結末が・・・。

広重は二人のエピソードから連想して、不穏な空気を感じさせる空模様と啼きながら飛ぶほととぎすを描いたのでしょうか？

時鳥（ほととぎす）は初夏五月に南方から日本に渡ってきて夏を告げる鳥です。

人の生活に密着して、昔から文学にとりあげられ、「ほととぎす」を表わす漢字は多くありますが、「時鳥」は夏を告げる代表として当てた字と考えられています。

「テッペンカケタカ」「トッキョッキョカキョク（特許許可局）」という聞きなしがある声は鋭く、遠くからでも聞こえます。

俳句の世界では冬の「雪」秋の「月」春の「花」と並ぶ夏の季語でもあります。

昔は初音を待ちわびました。

初音を待つのは鶯と時鳥だけです。

托卵の習性があり、鶯の巣に卵を産み、九月ころまで低地から山地の笹藪のある林に棲み、鶯と同じ場所にいます。

江戸入りの一ばん声やほととぎす

小林一茶（こばやし いっさ）（1763-1828）

ほととぎす痛恨つねに頭上より

山口草堂（やまぐち そうどう）（1898-1985）

4. 堀切の花菖蒲 (ほりきりのはなしょうぶ)

『名所江戸百景』五十七



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_056.jpg

五十七. 堀切の花菖蒲 | 安政四年 (1857 年) 閏五月

近景に咲き誇る花菖蒲を画面いっぱいに描き、遠景には花菖蒲園の中を散策する人たちの姿が見えます。

このように近景と遠景の遠近感を強調した構図は広重のお得意ですが、本図は特に完成度が高い作品です。

また、同じ花菖蒲と言っても、よく見てみると、花びらの形や模様はそれぞれ異っていて、各地から変種を取り寄せ、品種改良が行なわれていた様子も知ることができます。

花菖蒲に繊細なぼかしがほどこされており、多種多様な花菖蒲に対する広重の強いこだわりが感じられます。

堀切は綾瀬川と隅田川が合流する地にあった湿地帯で、花菖蒲の栽培に適していました。

文化年間（1804 年-1818 年）、土地の百姓伊佐衛門によって花菖蒲の栽培が始まり、二代に渡ってさまざまな品種改良も行われ、数万株の花菖蒲が咲く江戸で随一の立派な花菖蒲園となりました。

六月上旬から中旬ころになると、一面に広がる美しい花菖蒲を見ようと、江戸の町から船をつかって訪れる人たちが後を絶たなかったといわれます。

花菖蒲はアヤメ科の多年草で山野の湿地に自生する野花菖蒲（ノハナショウブ）を原種に、江戸時代初期に改良された国産園芸種です。

梅雨時、菖蒲園は見事に咲きそろった「花菖蒲」を楽しむ人でにぎわい、板橋をめぐるせて、見物人を楽しませてくれる所もあります。

同じアヤメ科の溪蓀（あやめ）や杜若（かきつばた）に似ていますが、花菖蒲はより大ぶりで豪華な花を咲かせます。

本来の花期は溪蓀や杜若より遅い 6 月ころですが、今は 4 月末ころから咲きはじめる早生咲きもあり、色も紫や白、水色、黄色、絞りなどあり、紫ひとつとっても、古代紫（こだいむらさき）など微妙な濃淡や赤味あるいは青味がかったものなど多種多様です。

栽培品種は約 1500 品種と大変多く、毎年新花が加わり、花それぞれに雅（みやび）な名を付けています。

単に「菖蒲」というと、端午の節句の菖蒲湯に用いる、花の目立たないショウブ科（サトイモ科）の別種を指します。

花びらを流るゝ雨や花菖蒲

高野素十（たかの すじゅう）（1893-1976）

ひらがなで物思ふ日の花菖蒲

鍵和田柚子（かぎわだ ゆうこ）（1932-）

5. 水道橋駿河台 (すいどうばしするがだい)

『名所江戸百景』六十四



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_063.jpg

六十四. 水道橋駿河台 | 安政四年 (1857 年) 閏五月

大きな鯉のぼりが悠然と空を泳ぐさまは実に晴れやかです。
 眼下に広がるのは駿河台の武家屋敷。
 駿河台の名は、徳川家康とともに駿河より移住した家臣たちが居を構えたことに由来します。
 鯉のぼりの下の方には疫病神を退治する鐘馗幟（しょうきのぼり）や吹き流しが描かれていて、端午の節句の時季とわかり、遠景の富士山がおめでたい雰囲気をもりたてています。
 画面中央に火の見櫓が描き込まれているのは、広重が定火消同心であったことも示しているのかも知れません。
 画面下部を流れるのは神田川で、水道橋は行き交う人々で賑やかです。
 川は広重ブルーで描かれ、江戸の市民に生活水を供給していた水の豊かさを感じさせてくれます。
 安政の大地震からの復興を象徴する作品です。

鯉幟は江戸時代中期ころから幟の一つとして現れ、端午の節句に出世魚である鯉を幟にして、男児出生を祝い、その子の健康と立身出世を願いました。
 武士階級が兜（かぶと）、薙刀（なぎなた）、毛鑓（けやり）、幟などを家の前に立てて飾り物としたのに対抗して、町人階級は武具の代わりに鯉幟を立てました。
 ちなみに鯉幟を飾るのは春のお彼岸が過ぎればいつでもよく、片付けるのもこれといった決まりはなく五月中に片付ければ問題ないようです。

ここでは「五月鯉（さつきごい）」「鯉幟」を詠んだ句を選びました。

紅塵を吸うて肉とす五月鯉（紅塵＝こうじん、赤茶けて見える土ほこり、または俗世の煩（わずら）わしさ、肉＝しし、五月鯉＝さつきごい）
 竹下しづの女（たけした しづのじょ）（1887-1951）

力ある風出てきたり鯉幟
 矢島渚男（やじま なぎさお）（1935-）

私も詠んでみました。

ほととぎす追ってゆらゆら吊り橋を

白井芳雄

今回は「初夏に観たい名画と俳句」をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典：小池満紀子・池田芙美著

『広重 TOKYO：名所江戸百景』（講談社）（2017 年）

ISBN978-4-06-220507-8

太田記念美術館監修 日野原健司・渡邊晃文

『広重 名所江戸百景』（美術出版社）（2017 年）

ISBN978-4-568-10495-0 C3070

安村敏信監修

『広重「名所江戸百景」の旅 あの名作はどこから描かれたのか？』（平凡社）（2014 年）

ISBN978-4-582-94568-3

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修

『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』（講談社）

ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 夏』（角川学芸出版）

ISBN4-04-621032-X C0392

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒 530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3 F

TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com